パトリック・ハインリヒ（獨協大学）

日本およびドイツにおける文化遺産としての言語

1990 年代にユネスコの主導で、存続が脅かされているすべての言語を把握し、文化遺産としてその保護を奨励しようという運動がスタートしたが、それはさまざまな 国家における少数言語に関する国際的論議の口火を切るものであった。その議論の中で人々は、国家における言語の多様性に関し、しばしば新たな、ときに驚くような認識に至っている。それが再び裏付けるのは、言語は国家的な文脈において、イーミック的（文化相対的）かつ政治的な現象となるということである。これは一般言語学の関心事ではないかもしれないが、圧倒的多数の言語学者が、20 世紀になって、言語に関するこういった捉え方を全力で推し進めてきた。ナショナリズムに動機づけられた言語概念化は、むろんまた言語的少数派の関心事とはなりえない。少数派の言語や文化は、不平等な力関係を支えるために、イデオロギー的かつ機能的に徐々に弱体化させられるからである。さらにそれは、21 世紀における先進国の関心事にもなりえない。なぜなら言語的・文化的同質性を求めるイデオロギー的な要求は、異文化間の共生や国際関係にとってひとつの障害となるからである。それにも関わらず、多くの国家にとって、自らの言語ナショナリズム的なイデオロギーを克服し、その土地に根付いている言語の多様性を受け入れるのは、相変わらず困難なことである。乖離したこの展開の原因は、とりわけそれぞれに異なった近代化の道筋の中にある。ドイツは、日本の言語的近代化に際して手本の役割を果たしたが、ドイツおよび日本の少数言語に関する現在の状況は、非常に異なっている。この講演が問題として提示するのは、とりわけこの点に関する日本の現在の諸問題であり、将来に向けての展望も試みてみたい。

****

パトリク・ハインリヒ

獨協大学外国語学部准教授。専門分野：言語、社会と思想史の関係を研究。近編著：『東アジアにおける言語復興』、『琉球諸語の記録保存の基礎』、『目指せ！琉球諸語の維持』、『Language Life in Japan』など。2012 年 2 月に『The Making of Monolingual Japan（単一言語国家日本の誕生）』出版予定。